

一 般 演 題 抄 録

21. 内視鏡下手術：その医療経済を考える

三橋章代 梅本雅彦 中井英勝 塩田 充 星合 昊

近畿大学医学部産科婦人科学教室

内視鏡手術は手術侵襲が少なく、患者のQOL向上につながるため、近年婦人科においても良性疾患に対して積極的に導入され、その適応は拡大している。しかし、内視鏡手術の保険点数は、開腹手術より高く設定されているがディスポ機材の多用により手術材料費がかさむことも事実である。そこで今回内視鏡手術の医療経済を考えるとともに当科での工夫を報告する。

今回我々は、開腹から内視鏡手術への移行が顕著である子宮筋腫の手術における医療経済について検討した。子宮筋腫の治療は、薬物療法の進歩により子宮温存手術あるいは手術回避の傾向があり、子宮筋腫に対する子宮摘出術の件数は減少傾向にある。子宮摘出術の術式も開腹術から内視鏡下手術（腹腔鏡下子宮全摘術、以下LAVH）に移行してきた。手術の保険点数に関しては、腹式子宮全摘と比較してLAVHのほうが12000点高く設定されている。しかし、医療材料費は、LAVHのほうが約85000円高額で

ある。その理由は、LAVHではディスポ機材に合計約84100円かかっており、特にトロカールには50000円かかっている。当科ではこのトロカールをリユーズの物を用いることにより、ディスポ機材にかかるコストを減らす試みを行っている。また、LAVHの導入当初は高価なディスポ機材である自動縫合器を使用していたが、現在では手術技術の向上から必要なくなりコストの削減に成功している。

腹式子宮全摘とLAVHにおける当科での過去の13例の入院期間と費用の平均を比較すると、手術費用はLAVHのほうが開腹術に比べて13万円高いが、入院期間が約10日短いため入院費用は10万円以上低くなる。つまり患者側の利点として入院期間の短縮、経済的負担の軽減が挙げられる。医療機関としてはベッドの稼働率をあげることで経済的効果はかれるが、子宮摘出手術の件数は減少傾向にあり現状では困難である。ゆえに、ディスポ機材の低価格化、リユーズ化が進むことが一層望まれる。

22. 当科で経験した過好酸球症候群 (Hypereosinophilic syndrome) の1例

太田育夫 松田光弘 炭本至康 兪 炳 碩 山口晃史
上田里美 宮里 肇 辰巳陽一 前田裕弘 金丸昭久

近畿大学医学部第3内科学教室

症例 20歳男性、平成5年5月、腹部膨満感を主訴に近医受診したところ、血液検査異常と脾腫を指摘されて、当院当科紹介される。【既往歴】特記事項なし、【家族歴】父 肺癌、【初回入院時所見】体温37.6°C、臍を越える巨大脾腫、前胸部に皮疹、WBC 11,700 (Net 4.7%, Eos. 81.5%) Hb 8.5, PLT 15.1万, NAPscore: 344(84%), 骨髓: 過形成, 異型性のない成熟好酸球の著しい増加を認める, 染色体46XY, 肝生検, 胃内視鏡, 皮膚生検でいずれも成熟好酸球の浸潤を認める, 【入院後経過】好酸球増多をきた原因疾患を認めず, Hypereosinophilic syndromeと診断した。その後ブスルファン, IFN- α で細胞数のコントロールを試みた。平成9年1月まで外来通院していたが, 以後外来受診せず。【再診後経過】平成12年9月に発熱, 皮疹および他医での血液検査異常指摘のため, 再診される。巨大脾腫は変わらず, 皮疹は全身に広がり, 頸部, 腋窩部および鼠

脛部にリンパ節を触知。WBC 44,500 (Net 6.0%, Eos. 78.0%), Hb 8.1, PLT 9.3万, Ery-blast 7%と成熟好酸急増多をみとめた。その後血小板減少が進行したため、平成12年2月入院となる。入院後も高用量ステロイド、脾放射を行うも好酸球数は変化なく、血小板減少はさらに進行し、脳出血で5月に死亡した。

考察 約8年の経過で骨髓線維症様の病態を呈し、出血傾向が顕著に出現した Hypereosinophilic syndrome の1例を経験した。骨髓線維症様の病態を呈し、頭部CT・MRI上に、髄外造血を思わせる所見をみとめた。この疾患の病態生理については、まだ不明な点が多いが、ステロイドをはじめ各種化学療法抵抗性を示す骨髓増殖性疾患の一例と考えられる。本症例のような治療抵抗性を示す Hypereosinophilic syndrome の有効な治療として考えられるものは、骨髓移植ではないかと思われた。